

わおん 通信

2026
vol.57

CONTENTS

P1 - P2

楽しく学び、行動する「うみわかまもるプロジェクト」
～令和8年「海の日」国土交通省海事関係功労者表彰式～

県情報

第25回わかやま環境賞の受賞者が決まりました！

P3

推進員ひょっこり訪問記

P4

なるほど ザ・ワード
INFORMATION

棚田のお米とベランダコンポスト
～キッチンから始める「食の循環」～

楽しく学び、行動する 「うみわかまもるプロジェクト」

～令和8年「海の日」国土交通省海事関係功労者表彰式～

2026年7月21日

NPO法人わかやま環境ネットワーク
ホテルオークラ神戸

海事関係功労者表彰は、国交省が海の日に当たり、海運、造船、港湾整備、海上保安、人命救助などで功労のあった人を表彰するもので、今年は76名10団体が表彰されました。2020年から始動した「うみわかまもるプロジェクト」は、海岸や干潟での清掃活

動や、こどもたちを交えた生き物観察会、海洋ごみ問題の学習発表会（わかやま海洋サミット）などを地道に継続してきた功績が、国（近畿地方整備局）から評価され「海をきれいにするための一般協力者の奉仕活動」として、近畿地方では1団体のみの「近畿地方整備局長表彰」をいただきました。今回の表彰は、今後も活動が続けていく大きな励みとなりました。

「うみわかまもるプロジェクト」は、一般財団法人和歌山環境保全公社が主催し、県内で環境問題に取り組む市民団体、企業、個人などによるネットワーク組織「NPO法人わかやま環境ネットワーク」が運営しています。こどもたちが海ごみや海洋プラスチック問題について「知る」だけでなく、実際の「行動」へつなげることで、海ごみ問題の解決を目指しています。主な取組は、「学校や地域への出前授業」「学習指導案・動画教材の提供」「うみわかまもるスクールの実施」の3つです。

「出前授業」では、これまで延べ7,000人以上のこどもたちと一緒に環境について学んできたケン先生が学校や地域を訪れ、海ごみ問題を分かりやすく伝えます。一方的に知識を教えるのではなく、こどもたちと一緒に考えながら、探究的な学びにつながる授業を行っています。

学校の先生が授業で活用できる「学習指導案・動



表彰式

画教材」も提供し、海ごみを題材とした学習に取り組みやすい環境づくりを進めています。さらに、学校や地域でプロジェクトに参加した方々を中心に、休日には海岸に集まり、「うみわかまもるスクール」としてビーチクリーンなどの活動を行っています。

海ごみ問題と聞くと、少し難しく、ハードルが高いものを感じられるかもしれませんが、私たちが大切にしているのは、楽しみながら海について学び、無理なく行動につなげることです。「うみわかまもるスクール」では、こどもたちによる紙芝居やダンスの時間を取り入れるなど、参加者が笑顔になれるよう工夫しています。

海ごみは、私たち一人ひとりの暮らしと深くつながっています。ごみを捨てない、減らす、正しく分別する。そうした小さな行動の積み重ねが、和歌山の海、そして日本や世界の海を守ることにつながると考えています。一方で、海ごみ問題は、本来、私たち大人が責任を持って解決していくべき問題であり、こどもたちだけに背負わせるものではありません。



うみわかまもるスクール

ん。そのため、本プロジェクトでは、こどもたちに清掃活動への参加を求めるだけでなく、一つひとつの体験を学びや成長につなげることを重視しています。

今後も、小中学校や市民団体などへの出前授業を続けるとともに、「うみわかまもるスクール」でも、さまざまな活動を展開していきますので、興味を持った方は、ぜひ「うみわかまもるプロジェクト」公式Webサイトをご覧ください。まもるくんと一緒に、皆さまにお会いできることを楽しみにしています。



うみわかまもるプロジェクト

和歌山の海を守るための環境教育プロジェクト。
「海」の「うみ」、「和歌山」の「わか」、
「守る」の「まもる」を組み合わせた名称。

メインキャラクター「まもるくん」



活動への参加や
出前授業の依頼も
お待ちしております。



うみわかまもる
公式WEBサイト

県情報

第25回わかやま環境賞の受賞者が決まりました！

県では、平成14年度に「わかやま環境賞」を創設し、毎年、県内において優れた環境保全活動を行う個人または団体を表彰しています。

表彰を通じて、受賞者の活動事例を広く紹介することにより、県民の皆さんの環境保全に関する意識向上と環境保全に関する行動の促進を図ることを目的としています。

6月8日に県庁で表彰式が行われ、知事から受賞者へ表彰状と盾が授与されました。

今回受賞された皆さんの活動内容は以下のとおりです。



表彰式

賞	受賞者	市町村	活動の内容
わかやま環境大賞	和歌山県立向陽高等学校 理学部	和歌山市	魚類相の調査・公表を通じた生物多様性の保全
わかやま環境賞	有限会社 ヒカル・オーキッド	有田市	産業廃棄物を出さない胡蝶蘭の製造や回収、再利用サービスの提供
	有限会社 深見梅店	上富田町	梅の生産加工において廃棄物ゼロのシステムを確立
	和歌山信愛中学校高等学校 Global Activity Club	和歌山市	外来植物から生分解性のゴミ袋を作る研究
特別賞	一般社団法人 しろにし	有田川町	過疎地域の課題に対して地域内外の人々と取り組むことで活力創出と里山保全を実現
	みなべ町立高城小学校	みなべ町	地域資源を活かした土壌づくりや農業体験を行うことによる環境保全と地域との繋がりのづくり



今回訪ねたのは、橋本市高野口町にお住まいの第19期和歌山県地球温暖化防止活動推進員（以下「推進員」）、榊洋史（さかき ひろし）さんです。推進員としての活動の意気込みを語ってくれました。

榊さんは小学校教員として長年教育に携わり、今年3月に橋本市立高野口小学校長を退職されました。

校長在任時は、SDGsの目標3「すべての人に健康と福祉を」にも通じる「ウェルビーイング」の考え方を柱に、こどもたちの未来を見据え、誰もが幸せを実感できる学校づくり、地域づくりに取り組んできました。

その中で大切にしてきたのは、一人ひとりが主体的に考え、行動することです。環境問題についても、一人ひとりの小さな行動の積み重ねが未来を変える力になると考え、こどもたちに伝えてきました。

推進員になったきっかけは、未来を担うこどもたちへ豊かな自然環境を引き継ぎたいという思いでした。

退職後は、自然の生態系を生かして有用な植物を育てる「協生農法」に関心を持ち、自宅の家庭菜園で実践しています。土に触れ、自然の循環を身近に感じる中で、環境を守することは特別なことではなく、日々の暮らしから始まるものだ実感しているそうです。

これからも教育現場で培った経験を生かし、環境問題を身近なものとして分かりやすく伝えながら、地域の皆さんと共に学び、行動し、持続可能な社会の実現に貢献したいと話されていました。

棚田のお米とベランダコンポスト～キッチンから始める「食の循環」～ NPO法人わかやま環境ネットワーク

橋本市にある「芋谷（いもだに）の棚田」を知っていますか。農林水産省の「つなぐ棚田遺産」に選定され、約450年前に開拓されたと伝わる棚田です。

ここで育ったお米をいただいたとき、「いつも食べているご飯とは香りが全然違う。とてもおいしい!」と、素直に感動しました。「どんな場所で作られているのだろう」と思っていたところ、実際に芋谷の棚田を訪れる機会に恵まれました。

芋谷の棚田を守り、未来へつなぐ拠点となっているのが「はしもと里山学校」です。約20年前、地域の耕作放棄地を減らし、こどもたちが自然と触れ合える場をつくろうと、地元住民が活動を始めました。

米の栽培方法を試行錯誤し、収穫後には天日干しを行うなど、手間をかけた農作業が続けられています。なかでも、草取りの大変さは並大抵ではないそうです。長年にわたって親しまれてきたこの活動は、思いを受け継いだ方々へとバトンが渡され、現在も大切に運営されています。

棚田や農地を守ることは、美しい景観や地域の文化を次の世代へつなぐだけではありません。農地の土壌には炭素を蓄える働きがあり、適切な土づくりや農地の維持は、地球温暖化対策にもつながります。

NPO法人わかやま環境ネットワークが運営する「和歌山食と暮らしプロジェクト」では、2025年から和歌山市内の耕作放棄地を借り、「食の循環ワークショップ」を実施しています。このワークショップは、種をまいて収穫するだけの農業体験ではありません。土づくりや畝（うね）づくりから、草取りなどの日常的な管理までを体験します。

参加者からは、スーパーで百数十円で買える野菜をつくるために、これほどの苦労があるのかといった驚きの声が寄せられています。高校生から小さなこどもを連れた親子までが

参加し、畑作業を通して、食べ物がつくられる過程や土の大切さを学んでいます。

食べ物が食卓に届くまでには、栽培だけでなく、加工や運搬、販売、調理など、さまざまな場面でエネルギーが使われます。せっかくなつくられた食べ物を捨てれば、そこまでに使われた資源やエネルギーも無駄になります。食べ物を大切に使い切めることは、暮らしの中でできる脱炭素の取組の一つです。

とはいえ、棚田に通ったり、畑で本格的な作業をしたりすることは、誰にでも簡単にできるわけではありません。「普段の生活でできることはないの?」と思う方には、自宅でのコンポストも選択肢になります。

生ごみをコンポストで堆肥にすれば、ごみとして処理する量を減らし、土へ戻すことができます。できた堆肥を植物の栽培に使えば、キッチンから出た生ごみが土を育て、次の食や緑へとつながります。ベランダやキッチンから始められる、小さな「食の循環」です。

NPO法人わかやま環境ネットワークでは、「挑戦したけれど続けられなかった」という声を受け、「コンポストコミュニティ」を実施しています。LINEで気軽に質問できるほか、コンポストでできた堆肥を回収する仕組みも設けています。

映画『もったいないキッチン』に着想を得た「リアルもったいないキッチン」という取組も行っています。余った食材をおいしく使い切り、調理で出た生ごみはコンポストで土へ戻す。棚田から食卓へ、食卓から再び土へ。規模は違っても、そこには同じ「食の循環」があります。

脱炭素というと、大きな設備や難しい技術を思い浮かべるかもしれませんが、しかし、食べ物を無駄なく使い、生ごみをごみのまま終わらせないことも、暮らしから始められる一歩です。まずは自分の家から、「小さな循環」を始めてみませんか。



芋谷川



芋谷の棚田（一部）



食の循環ワークショップ



和歌山食と暮らし
プロジェクトnote



「蛍光灯2027年問題」って？

「蛍光灯の2027年問題」を知っていますか。2023年に開かれた「水銀に関する水俣条約」の第5回締約国会議で、一般照明用蛍光灯の製造と輸出入を、種類に応じて2027年末までに段階的に廃止することが決まりました。蛍光灯には少量の水銀が使われているためです。

対象となるのは、直管形、環形（丸形）、コンパクト形、電球形などの一般照明用蛍光灯です。2027年末ですべての蛍光灯が使えなくなるわけではありません。規制後も、使用中の蛍光灯を引き続き使うことや、在庫品を売買、使用することは可能です。ただし、新たな製品の供給が無くなり、蛍光灯を入手しにくくなることが予想されます。

そこで考えておきたいのが、LED照明への切替えです。LED照明は蛍光灯より消費電力が少なく、製品によっては約40,000時間使用できるなど、寿命が長いことが特徴です。交換回数や廃棄物

を減らせるほか、電力使用量を抑えることで、CO₂排出量の削減にもつながります。

一方、LED照明への切り替えには初期費用がかかります。LED電球に交換するだけで済む場合もありますが、既存の照明器具との組合せによっては、器具の交換や配線工事が必要です。適合しないLEDランプを取り付けると、発煙や火災などにつながるおそれもあります。自己判断で交換せず、製品表示を確認し、必要に応じて販売店や電気工事業者に相談しましょう。

蛍光灯がすぐに使えなくなるわけではありませんが、一般社団法人日本照明工業会によると、照明器具を設置してから10年を「適正交換時期」、15年を「耐用の限界」としています。器具内の部品が経年劣化し、破損・発煙・発火する可能性があります。家庭や事業所にある照明の種類や使用年数を確認し、無理のない時期にLED照明へ切り替えられるよう、早めに準備しておきませんか。

INFORMATION

「わかやまCO₂CO₂(コツコツ)ポイント+(プラス)」がスタートしています！

二酸化炭素の排出量が少ない商品を購入すると、ポイントが上乘せ付与されるキャンペーンが8月6日から開始しました。日々のお買い物で、二酸化炭素の排出量の少ない商品は何か、対象店舗にて楽しみながら探してみてください。



詳細は、下記ホームページをご覧ください！
<https://wakayama-kankyo-portal.com/>



「おもしろ環境まつり2026」を開催します！

環境について楽しみながら親子で学べる祭典です！

それぞれのブースで工作やゲームにチャレンジできます！

開催日時：2026(令和8)年11月14日(土) 11時～16時

開催場所：海南nobinos（海南市日方1525-6）

海南保健福祉センター多目的ホール（海南市日方1519-10）



詳細は、下記ホームページで随時お知らせします！
<https://omokan.net/>



県センター通信

県から地球温暖化防止活動推進センターの指定を受けているNPO法人わかやま環境ネットワークは、6月22日から新体制になりました。長年、和歌山県地球温暖化防止活動推進員として活動してきた榎村健さんを事務局長に迎え、5名のスタッフで運営していきます。

活動の柱はもちろん地球温暖化防止です。これまで取り組んできた食品ロス対策や海洋ごみ対策を継続し、さらに発展させていきます。コンポストづくりの講座や、余りがちな食材を持ち寄る料理教室のほか、学校での海洋ごみに関する授業、地域での清掃活動など、実践を通して環境について考える機会をつくっています。また、関係団体との協定に基づく脱炭素の「伝え手」の育成支援や、県内事業者との連携も進めていきます。

こうした活動を広げていくには、推進員の皆さまの取組が欠かせません。まずは身近なところから実践し、皆さまが行っていることを県センターへお知らせください。「このくらいは当たり前」と思うことも、ほかの人にとっては新たな気付きや、行動を始めるきっかけになるかもしれません。小さな取組でも結構です。皆さまからのご連絡をお待ちしています。